



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



梅見の船五編上

97  
〜遠13  
871  
13





遠  
 141  
 卷 13

春色梅羨婦 祢第 五編 叙

源氏 立横の 竝びたり 謂所空聲夕顔

常 紅梅也 竹川と 白宮の

這を 最ふ 文は

企る 僕が 策も 横は

荒が 捨ま 唄の 織入 時代

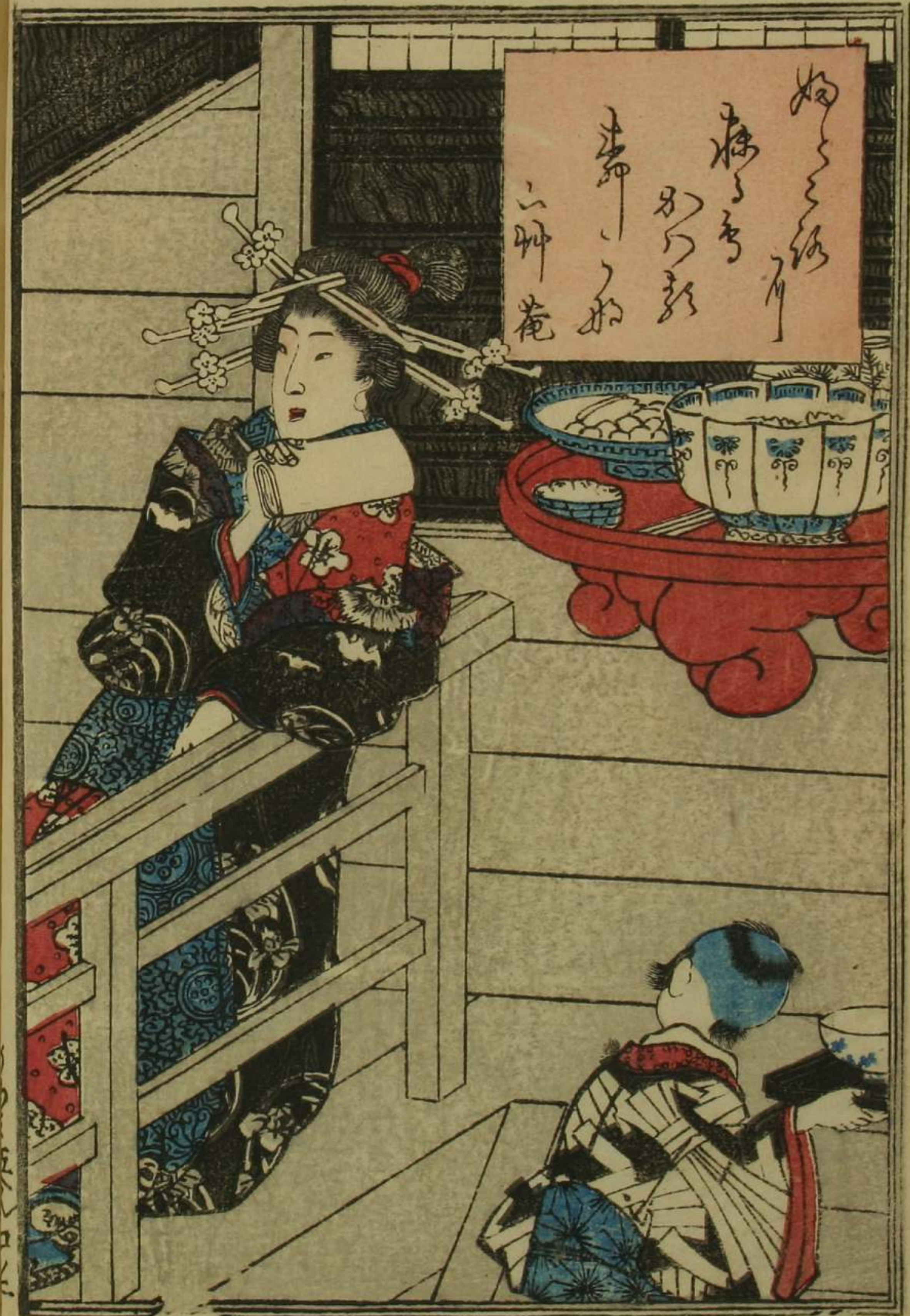
明治三十八年  
 十月十八日  
 購求



草色やう。紺桔梗をう。深紅を。多うゆも  
 多う。中々う。結介バ。八折。柳。若。衣。己の  
 園にう。結局。や。雪。か。れ。と。思。ひ。の。あ。り。  
 英。對。談。語。の。黄。粉。を。は。き。も。日。取。一。ツ。あ。ら。げ。く  
 梅。美。婦。跡。又。呀。匠。の。物。後。う。ハ。望。を。横。た。る  
 格子。縞。等。も。か。き。う。り。に。織。ま。し。と。取。を。晒。さ。ん

乙女。の。美。の。切。婦。子。を。い。し。し。し。し。と。預。め。ま。え。  
 若。紫。の。ま。え。を。横。雲。棚。の。曙。の  
 梅。花。の。中。め。う。等。紙。を。く  
 為。永。春。水。誌。の  
 近江の君。程。海。口。も。  
 赤。い。顔。を。潭。の  
 赤。い。顔。を。潭。の  
 赤。い。顔。を。潭。の  
 赤。い。顔。を。潭。の













春色梅美姉祢卷之十三

江戸 爲永春水著

第廿五回

九時の柏子木の音ハニシ〜〜〜 ちろろふゆゆる物雲の雲ハそを 暮暮まり〜引  
 一按曆アリト宵の澄ぎふ引替くひつそりとせし唐琴  
 屋の表彦安へ送り〜客を床小おさめて次の方より  
 静ろ小廊下へまゆるお園物るをちろ〜〜〜ホツト息お  
 ちもま〜〜〜離枝け花 史と見るより泣きよて







あつこのんぎぬさくうか茶たん竹の産婆ともみおどる  
せう其知へも寺内の判次郎今方茶さあらん何ぞ  
真なる吐しぐあひまはりのを娼妓も黠色ゆくのさる  
せううら茶して逃んか呉るまート言ふまーくお園ハ  
グットせーが怒と笑ひみ終らーくまーラヤまぢやア  
まはりもあひません子工私も判さんお言はせしめされ  
ひがあひまーまけヨ俗知の産婆ぶろ序ふお目ふ驚らん  
性ふゆめいーまは子工茶ア驚うおあまーアア

蕙さんの言まの勝ぎぬさくうまーラヤまぢやア茶の  
突あうぐあひまは子茶アア角の六尋ぎぬさくう然  
まお茶たんお肉が置ろ後刺まを挿んてお在るま  
あまお茶たんお道中と思ふてあらん茶さこのの  
あひまはくうまーま嬉しお意度心あひまはくう又空言  
まアお免ご子工茶ア今夜もア実心お美物さぬまヨ  
ト言ひまがら旅出ーくゆく  
什麼らのお園がさー新お判決希方お止宿ー時



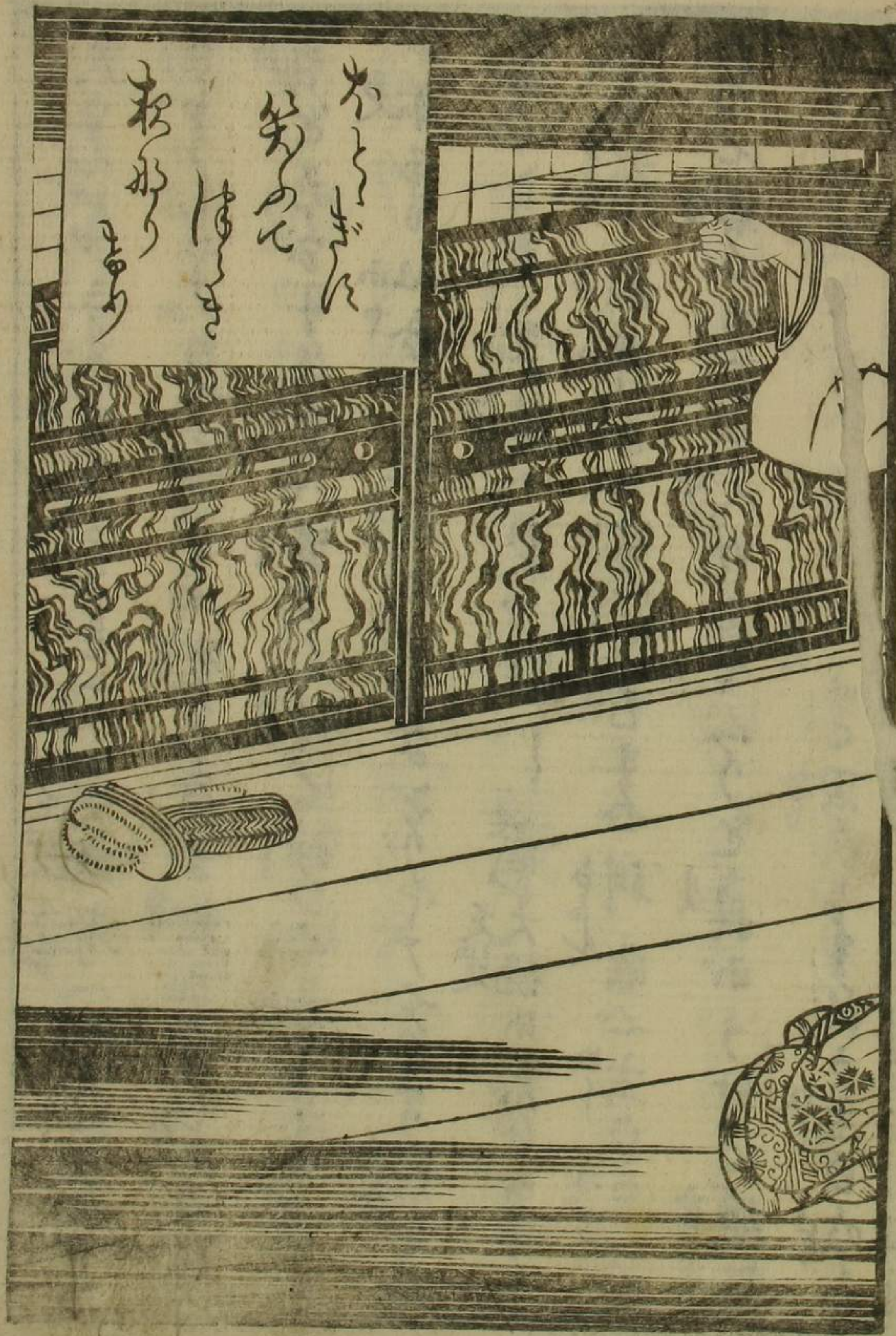
ち見ざるん 父善左衛門の亡魂の表現とくくはるい道に  
東方の物語りと二個小報知うるのそらび  
二十五の合もとも枕のやうに送くはるめど是れ  
仍て判決次第ハ善左衛門の妻 小対面して其  
夜の変を物語り遺言のとより是れをうんと  
實意を尽くしてお涙せしむるをよき見  
左衛門の妻ハ夫の自殺を彼のそら送書をも  
やしき 小ナらとて既みたるやお園を夫の子  
うらみとてとらぬ人ありしうらみは身を思ひ  
写しびしと我子とも見ると園小対し嫉妬の  
余りてとらぬまのうらみとて今も  
惜しくぬりけりども夫が自殺せしうらみ  
を安んずるも 万石を判決次第のむ  
ゆと判決次第も 安堵しとて 安んずるの懐  
もどく先け家めあるべしとてお園中もあつた  
母子の益を危くさせし二十友の合を元々

ち見ざるん 父善左衛門の亡魂の表現とくくはるい道に  
東方の物語りと二個小報知うるのそらび  
二十五の合もとも枕のやうに送くはるめど是れ  
仍て判決次第ハ善左衛門の妻 小対面して其  
夜の変を物語り遺言のとより是れをうんと  
實意を尽くしてお涙せしむるをよき見  
左衛門の妻ハ夫の自殺を彼のそら送書をも  
やしき 小ナらとて既みたるやお園を夫の子  
うらみとてとらぬ人ありしうらみは身を思ひ  
写しびしと我子とも見ると園小対し嫉妬の  
余りてとらぬまのうらみとて今も  
惜しくぬりけりども夫が自殺せしうらみ  
を安んずるも 万石を判決次第のむ  
ゆと判決次第も 安堵しとて 安んずるの懐  
もどく先け家めあるべしとてお園中もあつた  
母子の益を危くさせし二十友の合を元々















と  
よるまを定めておつて居るごらうかその女の  
名紙言ふが買ひつゝ此「ホニ」主あやうはんまうごぬは  
そんなふあうをまんまはさう言ひまをが買うご  
まはく判「ゆ年」速く波乞の此「ア」アアアアアアア  
久まあやう主「ゆ」お園さんハお板なるまはの  
判「エ」此「ソ」お見かま「覚」へがおはんまをせうご子判「  
ア」何と言ふくと思つてうんご点ちぐひと言ひか  
このお園といふは「あう」あうても居るが世話もなごらうハ

あつけまごも全く驚うしお飲トやうねん那ハ振れ義理  
合心「情」女ふるんま「う」のぎぬをう判「ナ」情女の  
意のことんを浮こりあやうねんサ大ごそりやうあは  
免「い」言ふこのごらう此「エ」あはさんごらうトやうあう  
せんあはさんごらうごらうごらうごらうと落合に主め  
免見とあなま「主」やう其ごらうもあつたり何の  
かのことごらうごらうごらうごらうごらうごらうごらう  
久まあはさんが私の所へ来るま「判」さんあうごらう



も放しく重た刃をもちせむ主ハ堅くなるまはつものり  
でも然うなうりもあらういのでま新が男の徳がぬと  
うう候令些やあらとの更ハあらてもお茶とんの顔さ  
汚まぶら宜となるまー私も丹さんで覚へがわり  
まはりうとあらうぐと言ひるまーうのを私まやう  
焼くうざぬーヨ然う言うちやう感うざぬが私  
店へ出くう今年で丁度七年ぶぬまがあの  
とりの内焼くまとうう茶八さんあやうまぎらば  
三十八

妓元や唄女流うびどのは重小合人さんびふ幸ひと  
私が新うあらん産後とあらん居まはくうと利て  
貸けくあらう人ハ我ねぶらあまはせんけまども  
今でもまらうを思つて私のうらうらうて異るものハ  
茶八さんたらうざぬまヨ此方も千葉の後さんが来さ  
あらんお茶も今年八年明ごとのみりごうままてあ  
何卒判さんを以茶の身かふて因出度交婦ふと  
やううと茶八も落く出ーもなるまごと言ひるまは



くさひぎぬをヨホンニ後さんや茶八さんが種々殊切の  
言ひて呉んうまはふつけてもおまわア一回も速く遠  
廊を出て主の側小居るやうありよいと永の年月  
指を折つてはしん心居るさぬとものせ今さう主が  
そんな心居て呉んうまーちやア折んまり可憐さうを  
さぬをわ人判、さうやアア、道程が先判さう言ふとさう  
遠方お知らぬさうさう詮方がねえともしも疑へ〜ハ  
お園を呼ん心明とてさう見えやう、此へそんなさう急度

うま十三九

然うさぬを子姪さうさぬをまよア私がお頼ひがあり  
まはが叶へくお呉るさう判へば改まるさう言ひ板  
どの陸分は身ぬ出来るさうさうさうア言ひて見ぬ  
さへ一さうさうさうとさう言ひるま甘んよア吾らぬと判  
まはもあ一天の川の鯉をとらて来く、漢汁は  
あ七喰せさうさう天初さぬの玉子を取つて来く、炮  
燻蒸ぬさうさう言ひると速く出来ぬさうさうア  
言ひて見ぬとさう言ひこのヨハハ主ーやア余程さう



きぎぬをヨおまやア戯言しやアの真ふお頼とが  
あるんぎぬをうう後と格と関てお呉るまーヨ判へ  
軽や王子心ねんまぶま面お咬くうう言ひおせは  
まおやア言ひまはか子ゆ年おがお頼ひぶう浮お心  
まくお園さんと晴合おるうて進てお呉るまート  
言ひまきく果う判次郎へ須臾言語もあぶぎうける  
第廿六回  
けあつ目お持 侯と徳へやうりと盛一け一判さん

是心私の物のうちにも控置してお呉るまー判へそ  
まやアお茶の味切ハ奈ーまうて居るけまどお園の  
るを頼むといふのふどもお解ねノウ中らなり  
身がゆ振うゆ情曲がのうと思つて連も然ううう  
うあうう詮方がうう知ま忍ん心まきるより奇  
兼ふ乃七其の方か寐覚が宜ひとりの了乃心今の  
中うお言つて呉るるのぢやア実お眼まどぞけ一いエ  
然う思つて呉るまーぢやア私の方こそ眼まぎぬをヨ



お園さんの身のうゑハ泳ぐ顔もまことりがあらん  
さぬとく未始終私も姫婿の接り心居るはく  
主もまご心見捨て進んお呉るまはなヨ判一何れも  
うとく分解ねえとて泳ぐおまこと六誰れお  
ままこのごらういその顔人さぬと久ト言ひつけ  
少一舞もぐ判一と見ね出さるごんごらう速  
お人の名が思ひつるさ久いアアサせんかお疑ひる  
ちやア眼さぬまヨそのおんご人とおのハ那嬢のおお

さんの小佛若た居つとよ仁さぬまが主も大方おん  
お在るませう子判一エ何れ一ア那仁がハサア是  
宅お歸りの中悲しの中今おひおしも凄然とる  
かうさぬとが子五日たより跡の脱お雨が大さう降つと  
まがかりま一とらう子那とき私さア獨り心産さみ  
寝て居るはと羨とも現ともさくま若た居つさんと  
仁が枕元へ来りま一とモウく無しの方ゆうおい  
お子と雲て見ると私のなるも美理のあつ伯父さん



さぬと申すとき伯父さんが言ひなすは、  
死にまじきも不便の八娘お園は、  
縁が判次郎を慕ふ他の男ハ持まゝと處女心  
思ひ込んず判次郎ハ知すも和女ハ義理を立通し  
外ハゆくり見せうけも心の疑ハおきぬ板子は  
己の上公定然りし情令と知りて狂ておび八子の  
周和女が今も廊を出て判次郎と交際する  
番もお園を引取て高と申すゆくりどもせめて判

三十三ノ十二

次郎の側へ参りておび八子の言葉も受けとる  
申すは身ハまより草葉の蔭にけ身もゆきど  
嫉しうらう異におびと言ひなすゆくりヤアおび  
諸合てお園さんハ嫉妬ともう二個心合はく  
判まんを大りおびる板おきまはる必おびとおび  
おびなと言ひなす伯父さんがおび合はせぬ  
おびやうぢぬ一が交際見へくるんおび一  
おびおびんまり不思義ぢぬをうら人と頼んで板子に





三十三



お父さんの死なまつていひのまは  
さんのおのうもまふ遠のういひぎぬはるる主の  
公と安さうあ心おの物も明とうとま心先刻の  
かふふ言らうんぎぬまうら何卒お園さんでも私せも  
見捨るのやうおはるお呉るまう一トま実の物捨る  
判次爺ハ言々もきく端息ついで居るおーも廊  
下先より能妓の姿あて花一モ娼妓工急用ぎぬ  
はるら身後味とお呉るまう一は一マ何ごノウもさ

二六三十四

なまらさう今性くうと然し言らて並るまう一  
アレサ直ぎぬせんと大後ぎぬせヨハ一ト世話一の宣ラ  
ぎぬはるら先へ性るまう一ト言ひるまうは性類と直して  
けハ吏あや判きん身後性つて直るまうはさくはら知  
へも性どふ精らん居るお呉るまう一と今このりも  
後刻まふ考へて並るまう一と返りとお聞せ  
るまう一ト言々を破しとけあハ一因と知んとあさる  
と死藤子の介お忍び居るお園とおりの顔見合



胸むねのせーグ小こ愛あいあ〜けいお園おさんぎぬと久き一いち時とき如ごと  
堪た忍にん〜くお呉える〜い是これ心こころありま久きヨト物ものをも言いひぬは  
ふと合あをろ〜おぐ〜り泣な入いるはけいアレサそんる泣な顔がほを  
あ七しち維いぞ見みろと悪わるうぎぬとヨ吏しトや〜今いまの〜を穿きみ  
ま〜この久きあハイ私わたしきやアお茶ちやさんの血ち源げん切きりハ死しんも  
忘わまへおませんヨけいナニサそんる沢たく下げやアあいが子こホニ丁ちやう度ど  
異いひおぢぎぬとく〜け上あ禁きんと初はつう〜あま〜して子こト言いひ  
〜卒そつ度ど脱だつ心しんお園おふ〜おせ〜身みふ〜と寄よせ〜けい

うらな十三十五

子こ。真まうぎぬと〜ト言いひま〜顔かほと赤あからぬるが〜ハ吏し心しんも  
そんる〜を〜あ〜やア何なん板ばんもお茶ちやさんのお氣いきの毒どくく  
ありま〜ものといけいアレサそんる心こころ死しゲ入いる〜の〜子こ何なん  
〜も判はんさんが私わたしごと〜思おもつ〜種たぐひくる〜り〜と言いひあ〜つ〜も  
死しひて〜人ひと居いるま〜せ〜言いひ〜ぎぬとく〜思おも入いるは可か能う  
が〜て芳よしひる〜ト言いひ捨すててけ糸いとハ上うへ革くわ履りも〜ぐ  
お園おふ〜〜〜ハ素す足あし心しんま〜〜と表あは産う〜〜ハ  
外あ〜ゆ〜心こころの中なかつを〜お〜けい



他者曰尚時廊中の通言を安く小古代と磨  
言葉と遠ひ多く素人の娘のどく今以来も  
元小倣へど作者も深く穿得ば只通客の  
批評と候のそ遠く責むものよりかむ往古の事  
跡と今縁づり小写しをさるる策子小あるもこバ  
き、流行小おるまどとけねるも言ふまじる也  
お園ハ以来の情ゆき初うくせよと教へら上巻  
まをハあせらるる事ども今更何程中なるもこるく

うすし三十一

燈火の暗きをさひ小産後の中へ我度り入ると  
あまハ立戻り獨りかせりあーが日頃衣し其人ハ  
屏風の中小居るのそ逢違るあまを付さるる  
今宵の首尾を介し天と思ひ切つと中入上  
装と脱て行燈へ屏風のうゑよりうち撒け顔と  
そむけく寄添へまともあまぬ判次第ハ淋しき  
終ふうらくと眠りけし眼を覚しは来るうんと  
思ふあぞ判ハヨヤ何時のそあ素て居るのけあア思ふ



藤のそとごころにて多きいりく大さうらう人にて  
おやアお人くと言ども先口て居るゆゑ小判一付も言  
お人てつう分解の那方の度まで何れ後と立て来この  
だかこゝ余所て乃と千倍喧嘩を以身の所へおと来て  
出つて呉ちやア迷惑とせエエは糸交とも那程待つて  
居る異ろと約束と乃と立てこのふけ身が藤て居る  
うま七後と立このうか茶も似合へお人おんまう  
初かみりトやアお人うコレサの故先口て居るのさまけお  
おん

うま七十三十七

言つても物を言へお人から振るぞと言ども中つなり先  
口て居る由を判「イヤハヤ強性る婦女トやアお人うそ  
うふ言へお人と乃と立て這方も善状とあらう中つなり  
利せき見せお人ト言ひつひらうり寄添へお人も  
お人いんたごり連子よりきい込む灯りお顔見合せ  
判「ヤアお人お園さんトやアお人うそのへ判さん堪忍して  
お人うまとい言へお人胸り判次第へお人うそのを思ひ  
ける



元 その 是よりか園 あつ 六 あつ け糸 あつ が漆 あつ き情 あつ を物 あつ 添 あつ り あつ の あつ こと あつ づ  
 る あつ ぬ あつ 舟 あつ の あつ 言 あつ 訳 あつ と あつ 添 あつ る あつ ぐ あつ ろ あつ 小 あつ 成 あつ 程 あつ 小 あつ 判 あつ 次 あつ 序 あつ も  
 今 あつ 更 あつ 小 あつ 最 あつ 茶 あつ け あつ 糸 あつ が あつ 言 あつ 糸 あつ と あつ つ あつ の あつ 捨 あつ ぐ あつ と あつ き あつ ち あつ の あつ ひ  
 何 あつ ほど あつ 多 あつ 量 あつ と あつ 二 あつ 世 あつ の あつ ろ あつ 小 あつ 成 あつ 程 あつ 小 あつ 判 あつ 次 あつ 序 あつ も  
 と あつ ぞ

春色梅羨婦松巻之十三了

f



